



食育、地産地消の取り組み  
『彩菜会』の事例から

特集

# 土からの返事が来た。

地元で採れたものを地元で消費する「地産地消」。最近、報道などでもよく取りあげられ、知られるようになりました。地産地消の活動を行う団体はいくつかありますが、豊科田沢小瀬幅区の農家らでつくる「彩菜会」が取り組むジャガイモ作りは、地産地消だけにとどまりません。この夏に行われた収穫作業をレポートし、食育の取り組みについて考えます。

今年、彩菜会の会員らとイモ作りを行った豊科南小6年生の皆さん。暑さも汚れも何のその。みんな100点満点の笑顔で収穫。



## 命を育み、食す体験

「こっちはすごい大きいよー」。子どもたちの元気な声が畑から聞こえます。8月23日(水)、田沢にある「豊科学校給食御用達」の畑で、豊科南小学校6年生の児童143人は、ジャガイモの収穫に汗を流しました。このジャガイモの面倒には、春の植え付けから、ずっと子どもたちがかわってきました。そして収穫したイモは、豊科給食センターに出荷し、11月ごろまで、給食の食材として使われることになります。



「食す」体験を行うことができる。取り組みは、豊科小瀬幅区の農家らでつくる新鮮市組合「彩菜会」が主体となり、平成15年から始まったものです。彩菜会は、発足時から地元農作物を給食センターに提供していましたが、会長宮下悦男さん(55)は、「もっと安全なものを提供したい。そして色んな体験をしてほしい」という思いが強いに強くなり、この農園でのジャガイモ作りを始めることにしました。

開園最初の年、宮下さんは、地域の親子とともにジャガイモの植え付けを行いました。当初は植え付け体験だけの予定でしたが、生き生きとした表情で植え付けを行

う子どもたちの姿に、手ごたえを感じ、収穫まで携わってもらおうようになりました。その翌年には、その実績から学校教育の一環として取り組むようになり、給食センターでも、ジャガイモの成長過程を随時「給食センターだより」に掲載するようになりました。現在ではこのジャガイモ作りは、豊科の各小学校が1年ごと交代で取り組んでおり、食育の活動として定着しています。

そして、今年は豊科南小の順番。この日迎えた収穫祭には、彩菜会会員、豊科学校給食センター職員が作業に加わり、土から来た返事をみんなで確かめました。

## ゴロゴロジャガイモ

彩菜会会員の指導のもと、子どもたちが、万のうで畑の土を掘り起こすと、ゴロゴロとジャガイモがその姿を現します。子どもたちは暑さも汚れも何のそので、はしやぎながらも手際よく、採れたてのジャガイモを積み上げました。今年は時間内では採りきれないほどの豊作で、約1・5トンの収穫がありました。

そして、採れたジャガイモは、収穫作業が終わる前に学校の調理室へ運ばれます。調理室では、各クラス8人の子どもたちとPTA役員のお母さん、担任の先生、栄養士の先生が待機。次々と皮がむ